

---

# 幻象画 ( ? )

絵夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻象画（？）

### 【Nコード】

N5629T

### 【作者名】

絵夢

### 【あらすじ】

京都を旅する二人。

そして、念願のオーロラ観察にフィンランドへ。

初めて本格的な人物画を描いた昌幸は、深刻な病に罹患する。

逃れられない死を前に、二人は楽しそうに旅立って行く。

京都へ、そしてフィンランドでのオーロラ観察。そして、終章へ

15、京都にて

京都駅新幹線ホームに二人の姿があった。

「さて、何処に行こうか？ あ、その前に疲れただろ、お茶でも飲もうか」

「いいわ。わたしは疲れてないわ。それにどうせお茶にするんだつたら、駅前なんかじゃなくて、もつと雰囲気の良い所にしましょ」  
二人は足取りも軽く歩き出した。何処に向かうのかは、繋いだ手で会話しながら決めるようだ。

取り敢えず清水寺を目指す。乗り物を使わず出来る限り歩こうと約束したとおり、まず、東山方面に足を向けた。

東本願寺に眼だけで参拝した二人は、ゆつくりと歩を進める。やがて五条大橋が見えてくる。

「ここで牛若丸と弁慶が初めて出会ったのよね。この欄干にひらりって跳び乗ったなんて信じられないわ。落っこちそうよね」

「鞍馬の山で厳しい修行をしたんだから出来たのかもしれない。

それにね、その頃の欄干って、幅が一メートルぐらいあったりして」

「あ、そうか、それなら出来たかもしれないわね。何言ってるのよ」

二人は、八坂の塔を回りこむと産寧坂（三年坂）に差し掛かる。

「人が多いね。きみ、じろじろ見られて嫌じゃない？」

「うん、ちょっとね。でも気にしないわ。あの二人仲良さそうね、羨ましいわって思われるんだつたら気持ちいいじゃない。本当のことですもの」

「そうだね。じゃ今度は腕を組もうか」

「いいわよ」

道の両側には、土産物屋、食堂などが立ち並んでいる。美しい清

水焼の湯呑、花瓶、コーヒーカップなど、見ているだけで楽しい。

「これ面白い。涼子へのお土産にしようかな」

「いいねー。でも、あまり似ているから可哀想な気もするね」

「ねー、このお揃いのコーヒーカップ買おうよ」

「スプーンとセットなんだね。いい色だなー。この控えめな渋さ、何とも言えない魅力があるね」

楽しく話し合っている二人に、店員や通りすがりの観光客の視線が注がれる。

「ヘイ、カノジヨ、オチャシナイ？」

「ノー、あんたとじゃダメ」

「オー、ノー」

と、頭を抱える。周囲の目を全く気にしている様子はない。二人だけの世界に入り込んでいるようである。

「ねえー、前に、昔のことはもう言わないって言ったけど、一つ聞いてもいい？」

「恐いなー、奥様お手柔らかに」

「冗談じゃなくて、高校生であなたとお付き合いしてた頃の事よ」

「いいよ。何でも聞いて」

「ほら、日曜日っていうと、大抵どちらかのお部屋にいたじゃない？ あの時、いつだったかは覚えていないけど、母が外出して二人だけになった時があったでしょ。それで、一緒にテレビで『愛と死をみつめて』っていうドラマの最終回見たのよね。それでさー、あなたあの時泣いてなかった？」

「えーっ、そんな古い事覚えていないよ」

「あら、あなた、あの頃の事は全部覚えてるって言ってたじゃない。さあ、正直に白状なさい」

「うーん、泣いてなんかいなかったよ。一生懸命我慢していた。男が泣くのは恥だと思っていたから。ただ、泣きそうだったのは事実だよ。きみは泣いていたよね。綺麗なカトレアの柄のハンカチを握り締めていた」

「そんな事まで覚えてるの？ いやーね」

「じゃ、今度は僕から古い事を聞くよ。いい？」

「いいわよ。さあ、聞いてちょうだい」

「さっきの続きなんだけど、きみと一緒にテレビを見ていた時、泣くのを我慢して、きみにそれを悟られないように、終わったあとすぐ、きみの部屋に戻ったよね。そして、きみが後から入ってきたあの時、本当は、きみが凄く可愛くて、抱きしめたくて、キスしたくてたまらなかった。でも、嫌われるのが恐くて何も出来なかったあの時、きみはどう思ってた？」

「わたし？ わたしはねー、ほんとにキスして欲しくて、やっぱり女の子にとってファースト・キスって大切なものだから、この人として思って、もの凄く緊張して、あなたの後から入って行ったのよ。そうしたら、あなた、難しい顔して固まってた。それで、まさか、いいわよなんて言えないから、わたしも黙って待ってたのよ。でも、結局何もなかった。悲しかったわ。いくじなして本当は思ったのよ。あの時あなたがキスしてくれてたら、二人の生き方随分変わったかもしれないよ。二十歳ぐらいで結婚して、今頃もう孫が何人もいたりして。あの後わたしたち何となくギコチナクなってしまったでしょ、辛かったわ」

「ごめん、あの時は本当にきみが大好きで、嫌われることが死ぬほど恐かったんだ」

「いいわ。許してあげる。わたし、あの夜考えたの。わたしのファースト・キスは、あなたとだったって思うことにしようって。もちろん、実際にはなかったのだけれど、このころの中では確かにキスしてたもの」

「時間が戻せるものなら戻してみたい。今度こそうまくやる自信があるんだ」

「バカねーっ」

「きれいね、あ、京都駅があんな所にあるわ。こうして見ると結

構遠いのね。あれって、東寺？」

七百七十八年、十一面観音立像を坂上田村麻呂が安置したのが始まりと言われている清水寺は、その本堂が「清水の舞台」として、あまりにも有名である。舞台の上からは、京都市街が一望でき、四季を通して人並みが途絶えることがない。

昌幸は、市街地を背景に、三重の塔の前でと、何箇所かで麗華を写真におさめる。居合わせた観光客も一斉にカメラを構える。不思議な感覚であった。

時間を掛けて清水寺に参拝した二人は、哲学の道を通って銀閣寺を目指すことにした。

高台寺、円山公園、知恩院を通って南禅寺へ。ここの三門は、高さが二十二メートルもあり、歌舞伎「楼門五三桐」で、石川五右衛門が「絶景かな」と大見得を切った舞台としてよく知られている。

南禅寺からしばらく歩いて、熊野若王子神社へ、ここからの疎水べりの道、約二キロが哲学の道とされ、哲学者・西田幾太郎が思索にふけりながら歩いたことがその名前の起りと言われている。

この道を行く二人に、先程までのような会話はない。時々擦れ違ふ人たちも、一様に物静かだ。そんな雰囲気の中で、二人は繋ぎあった手を通して言葉を交わしていた。

「桜が咲いていたらきつと素晴らしいだろうね」

「そうよね、でも、秋もよさそうよ。あなたはどっちが好き？」

「紅葉の美しさは、悔しいけれど、僕にはよく判らないんだ。でも、これから冬に向かっていくって言う、秋の終わりごろ、落ち葉が積もった山の辺の道を、夕陽を浴びながら、きみと腕なんか組んで歩く。時々冷たい風が吹いて、僅かに枝に残った枯葉が舞い落ちてきたり、足元をかさつ、かさつと動いていく。『寒くない？』とか言いながら、自分のトレンチコートを脱いできみの肩に掛けてあげる。そんなシーンを何度も夢に見た。だから、やっぱり秋、それも晩秋が好きだな。きみは？」

「うふっ、あなたって、本当にロマンチストなのね。ずっとそん

なふうに思ってた。なんだか凄く嬉しいわ。今度はそんな季節に来ましようか」

「いいね、そうしようか。……ロマンチストって言えば、もう一つよく見た夢があるんだ。でも、少しキザっぽくて、笑われそうだから教えたくないな」

「何よ。教えてよ。笑わないから。ねーっ」

「うーん、じゃ、絶対笑わないと約束してくれる？」

「いいわ。わたしの愛に誓って」

「……僕は、クリスマス間近の軽井沢で小さな山小屋風のコテージにこもって、毎日絵を描いているんだ。そこに、近くでの公演を終えたきみがやってくる。夜八時頃の事だな。一緒に食事を摂る。温かいクリームシチューだったよ。きみのクリスマスソング特集のレコードを聞きながら。確か、『愛のクリスマスソング集』ってあったよね」

「ええ」

「そのあと、ゆっくり食後のコーヒーを楽しんでから、僕は、暖炉のそばのロッキングチェアに座る。眼はきみの姿をじっと見ている。耳は、歌声に聞き入っている。着ている物は、僕は、シルバークレー、きみは、真っ白の、お揃いのバルキー・セーター。ざっくりとした少し大きめのね。胸にはお互いのイニシャルがさりげなく編みこんであるんだ」

「いいわね、とつても似合いそうよ」

「きみは窓辺に立って、室内の温かさで曇ったガラスの表面を綺麗な指でそつと拭き取る。真ん中辺りを、二十センチ四方ぐらいかな。夜の雪景色の中に、周りのコテージの人たちが飾り付けたクリスマスイルミネーションが美しく浮かび上がる。トナカイやサンタクロースやツリーなんかの色んな形にぼんやりと光ったり、点滅を繰り返したり、赤、青、黄、いろんな色があつて、凄く綺麗なんだ。そんな光景をしばらく眺めていたきみは、またうつすらと曇り始めたガラスに、指先で、僕の名前ときみの名前を書く。そして、

小さくため息を一つつくと、その下に、スキつて書くんだ。僕は、そつと椅子を立つと、きみの後ろに行つて可愛い肩を抱き言う。『世界一素敵な人の心をしっかりと捕まえたよ』そして、こちらをむかせ、静かに優しくキスをする。ペパーミントの薫りがするような、爽やかな、でも情熱のこもったキスをね」

「……凄いわ。そのシーンが浮かんでくるわ……。でも、折角だから軽井沢なんかじゃなくて、フィンランドかデンマークがいいな。北欧で、空にはオーロラが静かに見守っているなんて、最高よ」

「いいだろうな。テラスに椅子と毛布を持ち出してオーロラ観察をしようか。刻々と変化する神秘的な色や形は、きっと感動的だろうな」

「ねえ、行こうよ。連れて行つてよ。何年か先でもいいから」

「そうだね、北欧の風景にも触れてみたいし、出来るだけ早くチャンスを作つて行こうか」

「約束よ。あなたの愛に誓つて約束してよ」

言葉を介さない会話のうちに、やがて銀閣寺へ。

翌日は奈良へ。特急電車で三十五分と、意外に近い。

駅ビルを出た二人は、五分ほどで興福寺へ。この辺りから東大寺を含め若草山の麓まで、広大なスケールの奈良公園と呼ばれる一帯である。

あちこちで鹿が遊んでいる。観光客に鹿煎餅をねだる様子も見受けられる。

「くすっ」

麗華が思わず吹き出した。

「いやーねっ。あなたに聞いた、吉永小百合さんの歌のお話し、思い出してみましたわ。ほら、鎌倉に行った時のことよ」

「ああ、あれね。確かにあの歌って、こんなイメージだったよ」

「もうー、やめてよ」

麗華は、可愛い笑い声を立てている。



「ねえ、わたし達って、修学旅行みたいね」

「そう言えばそうだね。じゃ、ここから少し戻って、奈良町の方に行ってみようか」

「奈良町って何処にあるの？」

「ここを南の方に行くと、猿沢の池があるんだ。その南側に古い町並みが残されているんだよ。行ってみようか」

狭い道の両側に、漆喰の壁と格子の美しい民家が並んでいる奈良町は、元興寺の門前町として発展し、江戸時代には、奈良の中心となっていた。その美しい格子は、ならまち格子と呼ばれている。奈良町資料館、庚申堂はじめ、数々の展示施設も整備されている。

「ね、あれってなーに？」

麗華は、あちこちの軒先に吊るされた赤い物に興味を惹かれた様子だ。

「あー、あれはね、身代わり猿って言って、災難や病気が家の中に入らないようにするための、庚申信仰のお守りなんだよ」

「へーっ、面白い格好してるのね」

「タイムスリップしたような気分だね。懐かしいと言うより、僕たちが覚えている時代よりもっと前の雰囲気だね」

「きつと江戸時代って、日本中こんな町並みだったんじゃないかしら」

「京都って、坂本竜馬や新撰組なんかで江戸時代末期にも結構登場するよね。でも、奈良って全然表舞台に出てこないんだよ。あの時代、どうだったんだろうか」

「……そうね、不思議ね」

気の向くまま東へ西へと奈良の町を徘徊した二人は、夕刻五時頃京都に戻った。

この旅行最後の夜は、思い切って、平安グランドホテル、スイートルームで過ごすことになっている。

いままさに暮れようとしている古都は、美しかった。紅に染まっ

た西の空が、次第にその濃さを増してくる。薄ぼんやりとしていた街の灯りが徐々にその存在を現わしてくる。和ローソクに似せて作られたと言う京都タワーがライトアップに浮かび上がろうとしている。つい先程まで強烈な光に輝く伽藍を見せていた東山の寺院は、そろそろ間に溶け込もうとしているのか、もういまはただシルエツトしか見えない。ぐるっと首を回すと、夕陽の力に抗うように佇立していた東寺の大きな五重の塔も、あつという間にねじ伏せられて、歴史の重さを現わす、ひっそりとした影を投げ掛けている。

「そろそろ食事に行こうか？」

「うん、でも今、わたしこのお部屋出たくないわ。ルームチャージでコーヒーでも取らない？」

ほどなく部屋にコーヒーが届けられた。

ほろ苦さが口の中いっぱいに広がっていく。まさに、至福のひと時である。昌幸は、麗華の肩に回した手にほんの僅か力を込めた。

「おいしい？」

テレパシーで囁きかける。

「幸せよ」

と、即座に帰ってくる。思わず、彼の声が出た。

「会話が噛み合っていないよ」

「いいのよ。おいしくて、幸せなんだもの」

で、また沈黙。今度は、お互いの眼で会話を愉しむ。

「ねえ、歌でもテレパシーで送れるのかなー」

「どうかなー。テレパシーって、意思の伝達じゃない？ 歌って、

意思じゃなくて、歌詞だから無理なんじゃない？」

「へーっ、きみもそんな駄洒落言っただ」

「わたしだって、あなたと結婚してから頭が柔らかくなったのよ。ダジャレの一つや二つ言うわよ」

「何か僕の影響みたいに聞えるんだけど」

「そうよ。じゃーねー、メロディをテレパシーで送ってみてよ。わたし、それに乗せて唄ってみるわ」

結局これは無理だったようだ。二人は声を出して笑った。そして、そつとくちびるを合わせた。自然で、お互いへの思いと思いやりのこもった甘いキスであった。

「幸せ、あなたありがとう」

「お礼を言ってくれるんだっいたら、もう一度」

真顔で迫ってくる昌幸を、麗華はさつとかわす。

「ちよつと、勘違いしないでよ。幸せって言うのはいまの実感。

後のありがとうは、京都へ連れて来てくれてありがとう。ってことなの」

「なんだ、そうか。僕はまた……」

楽しく語り合う二人であった。

「きみは歌手だった頃、全国をほとんど廻ったと思うけど、これからは、年に二度ぐらい、そうだなー、春と秋にこうした旅行をしようか」

「賛成、大賛成よ。全国を廻ったって言っても、お仕事で行ったのと、あなたと行くのでは全く違うもの。それに、お仕事の時は、会場に着くと、唄ってまたすぐ次の会場へ、っていう具合だったから、観光なんてしてないのよ」

「そうだろうな。じゃ、今度は何処に行こうか。きみに希望はある?」

「わたしは何処でもいいわ、あなたと一緒になんだから。でも、これじゃ決まらないわね。本当にいいのよ。あなたが行きたい所で」

「こうして一つか二つの町をゆっくり見て廻るっていいね。……」

次は、秋に、角館か遠野なんてどう?」

「いいわね。両方とも何となくロマンチックで」

次の予定はこうして簡単に決まった。

「麗華、いる?」

涼子の声が聞えた。珍しく山口と新海の二人の後輩弁護士を従えている。

「涼子、いらつしやい。あら、山口さんと新海さんも一緒なの？  
さあ、入って」

「いらつしやい。久しぶりですね。元気でしたか？」

「あ、はい、なんとか頑張っています」

一瞥以来の挨拶が続く。この遣り取りが涼子にはたまらなく愉快らしい。部屋の外で麗華と二人、顔を見合わせて笑っている。

ほどなく五人の前にコーヒークップが置かれた。今日は「モカ」だ。芳醇な薫りが室内を満たす。

「新海君、あなたこの二人初めてじゃないわよね」

「ええ、三年前に一度お会いしました」

ポーツと上気した表情を浮かべた新海は慌てて応えた。

「確か、あの時は山口さんとお二人でしたわよね」

麗華の問い掛けに、

「は、はい」

新海はますます動揺する。

「どうしちゃったのよ、落ち着きなさいって」

涼子がたまらず言葉を掛ける。アトリ工は笑い声に包まれた。

「遠藤先生が顧問をしている東光物産が、今度本社ビルを新築したのね、それで、会長室に飾る絵を贈りたいんだけど、それとなく聞いてみたら、やっぱりその会長さんも二階堂さんの絵のファンだって判つたらしいのよ。それなら、今どんな絵をお持ちなのか、一度聞いて来いって事になったんだって。そうよね」

「はい、それでもしよかったら写真を撮らせて貰って検討したいって言っていました」

新海はようやく少し落ち着いてきた。

「いいですよ。作品は、大小取り混ぜて二十点以上ありますが、全部撮影しますか？」

「あなた、この前君島さんが写して下さい下さったお写真があったんじゃない？」

「あ、そつだ、全部あつたよね」

「もう撮影されたものがあるんですか？」

「ええ、それでよければ差し上げますよ」

これで、山口と新海の用件は終わってしまった。

「奥さん、一つお聞きしていいですか？」

「ええ、どうぞ」

「たしか、僕の記憶では、初めてお会いして、もう八年になりますよね」

「それぐらいになりますかしら。いやだ、歳の事？」

「いや、そうじゃなくて、あの時と今と殆んどお変わりになっていませんよね。相変わらず若々しくて、体形だつて全くお変わりになっていない。何か秘訣みたいなものがあるのですか？ あるのでしたら、うちの家内にも勧めてやりたいと思つています」

「そつよね。あんた、髪、染めてるの？」

「いやーねつ。わたしつて髪染めたことないのよ。自然が一番つて思つてるから。ほら、昌幸さんだつて染めてないし。でも、わたし自身不思議に思つてるのよ、シラガつて生えてこないのよ。お化粧だつて殆んどしないし、秘訣つて聞かれても、わたしにも解らないわ」

「まるで、世界の七不思議だね。この子とは長い付き合いだから、若い頃から知つてるけど、全然変わつてないのよ。そりゃ、好きな人と一緒になつて、毎日が充実してて、病気なんかになつて暇がないつてのならまだ解るわよ。でも、この子の場合、私が知つてる限りでも三十年以上病気一つしたことないし、美しさだつて変わつてないのよ。普通芸能界にいた人つて、だんだん人前に出なくなつたりして、たまに出てくると随分化粧が厚くなつてるのが判るじゃない。ほんと不思議に思つてるんだけど、この子、ルージユは引いてるけど、殆んどスツピンよ」

涼子は呆れたように言つた。

「夜の灯りの中で見た綺麗な人に、朝会つてみると、あんた誰だ

つけ、って言う笑えない笑い話がありますよね。奥さんの場合、朝だるうが、夜だるうが一緒なんですよね。旦那さんが羨ましいですね」

「でも、二階堂さんにヤキモチは感じない。ほら、よくあるでしょ、立つてる土俵が違うつてやつ。だから、何か当然だつて思えてくる。この二人なら許せちゃうつて気がして」

「よしてください。そんな事はないですよ。僕だつて、この人の事だけは未だにどうしても主観的にしか見ることが出来ないんです。僕が言うのは大変恥ずかしいのですが、何でこんなに綺麗な眼をしているんだろつ、とか、何でこんなに立ち居振る舞いが上品なんだろつて、いつ眼を合わせても思つてしまう。そういう不思議さは、この人は生まれながらにして持つていていると思います」

「ありがとうございます、あなた」

「これだもんね。私、いつもこんな遣り取りを聞いているのよ。でも、この二人の場合、やっぱり許せて仕舞う。雑念がないんだろつね。心底思つてるから、言葉や表情に無理に作つてるものが浮かんでこない。やっぱり、生まれた時から結ばれるつて決まつた人達だなつて、正直思つわ」

「……」

「……」

「ところで、あんた、この間何処に行つてたの？ 四日間ぐらい居なかつたじゃない」

「ええ、二人で金沢へ行つてたの。完全休日にして。二年前、京都へ旅行した時決めたのよ。年に二度、春と秋に全てを忘れ、三、四日ぐらいの旅行をしようつて。あ、涼子のお土産があるわ。あとあげる」

「ありがとうございます。何かしゃくだけで、有り難く貰つてあげる」

「ところで山口さん、奥様お元気ですか？」

と、昌幸が聞いた。

「あ、はい、ありがとうございます。元気にしています」

「あなた達も結婚してもう五年ぐらいになるかしら。どう、ちゃんと奥様大事にしてる？」

麗華に言われ、山口は満面を朱に染めた。

「は、はい、大事にしています。この間も、温泉に連れて行きましたし、月に一度は子供を母に預けて外食をするようにしています」

「へーっ、山口君で意外に優しいんだ」

と、涼子。山口はますます真っ赤になりながら、

「身近に素晴らしいお手本がありますから」

「あらっ、わたし達の事？ だめよ、お手本なんかにはならないわ。ねえ、あなた」

「あ、あー、そうですよ」

困ったような表情で昌幸は応えた。

「新海さんはいいい相手いらっしやるの？」

四人の会話を楽しそうに聞いていた新海は、突然問いかけられ、大いにうろたえながら、

「い、いえ、まだいません」

と、応えるのが精一杯であった。

「二階堂さんの絵って、最近、また変わってきていませんか？」

山口がアトリエを眺め回しながら言った。

「え、わかります？ そうらしいですね。自分ではよく判らないのですが、画商さんに言われる事がありますよ」

「銀座の光風堂画廊で作品を見せて貰ったのですが、何か凄みのようなものを感じました。もちろん、絵の中で考えたり、感じたり、遊んだり、その時々で変化する自分の心を映し出すような気持ちにさせられるのは変わってはいませんが、何かそこに、惹きつけられる凄みって言うんですか、引力って言った方がいいのかな、そんな感覚を覚えました」

「ありがとうございます。ってお礼は言うのですが、この人と再会してからの自分の作品は特に、自分が描いたという実感が無いの

です。個展なんかで自分の作品の前に立つと気恥ずかしい気持ちになるのですが、最近はあまりそんな気持ちにならないんです。誰か他の人が描いた絵を見るような、どこか客観的な視線で見ている自分に気付くことがあるんですね。もちろん、間違いなく自分の手で描いたのですが。上手く表現できないのですが、誰かが、私の手を使って描かせてくれているような、そういう気持ちになりますね」

「……凄いい、それって凄いい事ですよ。僕も前に、彫刻家の話しなんです。木切れを見ているとその中に仏様が埋まっていたら、やるのを見ることがある。私は、それを掘り出させて頂いているだけなんです。って聞いたことがあります。何かそんな話を思い出します」

「八年前にアフリカで大地に沈む夕陽を見ていて、何か自分の絵が変わると言う予感みたいなものを感じました。その時は、何がどうという事は解らなかつたのですが、今思うと、今度の自分の絵の変化はその時から始まったのかも知れませんね」

麗華は、とつとつと語る昌幸の横顔を頼もしそうに見詰めていた。

## 16、フィンランド紀行

「二年前、京都で約束した北欧への旅行なんだけど、来月行きたいと思うんだ。きみはどう？」

一週間ほど前から三十号のキャンバスと格闘していた昌幸は、少し疲れたのか、筆を置くと、軽く眉間を揉みながら唐突に言った。

「えっ、本当？ ……ちゃんと覚えててくれたんだ。嬉しい」

「勿論だよ。僕の愛に誓った約束なんだから忘れてなんかいないよ。クリスマスを向こうで過ごしたいから、二十日頃から十日間ぐらいでどうだろうか」

「いいわ、いつでも。素敵でしょうね。本当にあなたとオーロラを見に行けるのね」

つつとり夢見る麗華の瞳は、キラキラと輝いていた。



新東京国際空港を昼頃に飛び立った、フィンランド航空機は、定刻、ヘルシンキ・ヴァンター国際空港に着陸した。およそ九時間半のフライトであった。

機外へ一歩踏み出した昌幸は、深呼吸しながら手足を大きく伸ばした。張りつめた冷気がパキパキと割れる様な気がする。彼は思わずブルツと身体を震わせ首をすくめた。

「クスッ」

そんな様子を見ていた麗華は、彼の腕を抱え込んだ。

「疲れた？」

「いや、そうでもないよ。きみの可愛い寝顔を見ていたら知らないうちに眠ってしまった。気がついた時には着陸態勢に入っていたよ。それより、きみは？」

「麗華の辞書には『疲れ』なんて言葉はないのよ。あなたと一緒にだからいつだって元気一杯よ」

空港からはエアポートバスがヘルシンキ中央駅まで三十五分ほどで結んでいる。彼らは駅の目の前にある「クムルス・セウラフォネ」ホテルに二泊し、市内観光を楽しんだあと、オーロラ観察のため、ユツラスに向かうことにしている。

北極圏にラップランドと呼ばれる一帯がある。フィンランド、ノルウェー、スウェーデンの北部が含まれ、ヨーロッパでは最北の地方である。

二人がオーロラ観察に選んだユツラスは、そのラップランドの中にあり、ヘルシンキから飛行機で一時間半、空港からバスでさらに一時間という、広大な森に囲まれた地域で、アカスロンポロ村とユツラスヤルビ村を併せてそう呼ばれている。オーロラ観察、ウインタースポーツのメッカである。

「雪って好きだね。汚れたもの、醜いものをみんな隠してくれるから」

ユツラスへ向かうバスの中で、麗華はポツリと言った。

「雪は、その時々の変化、例えば夕焼けの時は紅に染まるし、夜には濃紺に、また街灯なんかも映し出す。やっぱり僕はキャンバスを連想するな」

「白無垢ってあるじゃない？ わたしは、穢れのない清らかさを感ずるわ」

「僕はその穢れなきキャンバスをせつせと汚しているんだなー。そういえば、今から二十年ぐらい前、スランプだったのが、一つの壁にぶつかって苦しんだ時、何も描かず『雪』とタイトルをつけて発表したら、なんて考えたことがあったよ」

「じゃあ、黒一色にして闇夜なんてどう？」

「前に、真つ黒な背景に黒猫を描いて欲しいという依頼を受けたことがあるよ」

「えーっ、それでどうしたの？」

「うん、毛並みを銀色の濃淡で表現したんだ。眼がキラッと光って、苦労した分、うまく描けたと思っている」

「……いいわね。素敵な絵だったでしょうね。見たかったわ」

「今度は、真つ白なキャンバスに兎でも描こうか」

遙かな星空の彼方から降り注ぐ淡い緑のオーロラは、濃紺のスクリーンに映し出される神秘のカーテンである。薄絹のそれは、天女の羽衣のように、また、風にたなびくプリーツスカートのように、ひと時もじっとしていることはない。それは、広がり、きらめき、ゆらぎ、圧倒的な迫力を持って、遠い宇宙からのメッセージを伝える。

波動を感じる。強く、弱く、魂を掴み揺り動かす。鼓膜を打つ。心地よい旋律が、突然、力強い律動になる。このコンダクターのい

ない壮大な天体のオーケストラは、耳にメロディーを、眼には虹色の光のシンフォニーを、身体全体には宇宙の広がりと無限のちからを感じさせる。

冷たく温かい不思議な感覚は、研ぎ澄まされた大気の中で妙に心地よく、神の手に身を委ねたような安心感をも感じさせる。

感動の渦の中に居る二人に会話はない。握り合った手のぬくもりが昂揚した感情を伝えあっている。「この圧倒的な情景は、自分なんかの力量ではとても表現できない」

昌幸は思わず心の中で呟いた。

「できるわ。あなたなら絶対出来る。わたしそう思う。あなたの素直な感性や純粋な心は、このオーロラの波長と同じじゃない。帰ったら描いてみてよ。凄く楽しみだわ」

「きみに楽しみにされても困るな」。いま、僕はこの迫力に圧倒されてしまって、イメージも構想も全く湧き上がってこないよ」

「いいわ。いつまでも待ってるわ。待たされるほど楽しみって大きくなるものよ」

「きみに言われると、描けそうな気がしてくるから不思議なんだよね」

「ねえ、あなたの絵のイメージって、いつもパツて湧き上がってくるの?」

「うーん、その絵その時によって違うんだ。きみの顔を見ている時に突然素晴らしい光景が浮かんできたり、目を閉じて瞑想していると徐々に固まってきたり、時には何もイメージがないのに勝手にコソテを動かしている時があるよ」

「へーっ、面白いわね。じゃあしばらくわたしの顔見てていいから、何かの映像が浮かんだら教えてよ」

「それは無理だよ。どんな時に閃くか解らないんだから」

二人は、夢にまで見たオーロラの下で、夢のような時間を過ごしていた。

天空では、グラデーションを微妙に変化させながら優雅な舞を一

時間ほど繰り広げたオーロラは、出現した時と同じように静かに消えていった。

「わあっ、可愛い」

サンタクロースをデザインした小さな銀のペンダントを手に取ると、麗華は思わず声を上げた。

ここ、ロヴァニエミは、ユツラスから高速バスで三時間ほどの距離にあり、サンタクロースに一年中会える町として有名である。

なかでも、サンタクロースをテーマにしたサンタパークと、サンタクロース村は、世界中の子供達にもよく知られている。

この時期、町はいたるところクリスマスイルミネーションで飾り付けられ、降り積もった雪景色と相俟って、幻想的でロマンチックな雰囲気に含まれている。

二人はサンタクロース村に来ている。

「あなた、いくつぐらいまでサンタさんって信じてた？」

「今でも信じてるよ。と言うか、信じたいと思っている。イヴには、あのサンタさんが、エイツで気合とともに、魔法の術かなんか使って、何万人にも何十万人にも分身して世界中の子供達にプレゼントを届けに行くんだよ。もちろん、トナカイの曳くソリに乗ってね。あれだって、どうやって空を飛んで行くんだろうとか、煙突のない家には何処から入るんだろうなんてことは考えないで、とにかくいい子にしていれば、自分の欲しいものを届けてくれると思っていた方が、夢があつていいよね」

「日本じゃ、おもちや屋さんに連れて行って一緒に買ってあげる事結構あるじゃない。あれって、夢がないなーって思っていたわ」

「クリスマスって、言うまでもなくキリスト教の行事なんだよね。だから他の宗教、例えばイスラム教とか仏教には関係ない筈なんだけど、日本じゃ小さな子供でも知ってるし、パーティーなんかで盛り上がったっている。もともと仏教ってのは、他の宗教の神様も受け入れる器量の大きさを持っているんだけど、そんな事とは関係な

く、一つの行事として愉しんでいる。本当の意味が解っているのか、なんて言う人もいるけど、僕はそんな事あまり気にしなくてもいいかなと思うんだ。確かに、キリスト教徒にとつてのクリスマスとはかなり違つてきてしまったと思うけど、日本的クリスマスつてのもあつていいと思うよ」

「そうよね。キリスト教徒の人達は、教会に行つて静かに祈りを捧げたり、お祝いをしたりすれば、それはそれで素敵だなつて思うし、そうじゃない人達は、お友達や家族と賑やかにパーティをしたり、恋人同士でプレゼントの交換したりつていうのもいいかなつて思うわ。つまりね、どうでなきゃとか、本来はこうあるべきだなんだなんて堅苦しく考えなくても、ちゃんと儀式としてのクリスマスはそれとして続いていくんじゃないかな」

「どんな行事でも、あまり堅苦しく考えると世の中が凄く窮屈になつてしまふよね」

「バレンタインデーだつて、いまは女性が強くなつてしまつて、あまり必要とは思わないし、義理チョコとか、本命チョコなんて変な言葉が出てきたりしてるから、どうかなつて思う事もあるけれど、この日が切つ掛けで生まれたり、育まれた愛だつてあると思うわ。やつぱり素敵な行事なのよね」

「バレンタインデーつて言えば、きみに告白しなきゃならない事があるんだ。告白なんて大袈裟な事じゃないんだけど」

「えーっ、何かなー、いいわ、聞いてあげるからちゃんと告白なさい」

「実はね、帝都百貨店での個展で再会した時、きみに『食べてね』つてチョコレート貰つたよね。あれ、もったいなくて、とても食べられなかつたんだよ。いまでも大切にしまつてあるんだ」

「クククツ、バカねーっ。もうカビがはえてるわよ」

魅惑的なキャンドルの陰から、本物？のサンタクロースが柔らかな微笑を浮かべ、何やら楽しそうに話し合つている二人を見守つていた。

ヘルシンキに戻った二人は「クムルス・セウラフオネ」ホテルに再び宿をとった。

このフィンランド旅行も明日の午後には帰国の途につくことになっている。

「二日遅れのクリスマスプレゼントをきみに用意してあるんだ」  
部屋に入ると、昌幸は切り出した。

「……オーロラが見られただけでも最高のプレゼントを頂いたって思っただけで感謝してる。永遠に忘れないわ」

「このプレゼントが旅行の一番の目的なんだよ。感謝なんかいいから受け取って欲しい。と言っても物じゃないんだけどね」

「……？」

「むかし、三十年以上前の事だけど、確か、月刊誌で『シンフォニー』っていうのがあったよね」

「……ええ……」

「その何月号だったかは覚えていないけど、新進ミュージシャンの座談会の記事があったんだ。その中できみは、クラシックでは、シベリウスの交響曲第一番が大好きですって言ってたよね」

「えーっ、ちょっと待ってよ。そんな事よく覚えててくれたわね。信じられないわ。もちろん、いまでもあの曲大好きよ」

「今夜、フィンランドディア・ホールで、ヘルシンキ・フィルハーモニーのコンサートがあるんだ。そこでこの曲が演奏されると判っていたから、旅行会社に頼んでチケットを取ってもらったんだ」

「……オーボエの静かな旋律で始まる曲は、大胆な展開を見せる。拡がる。豊かな奥行きを感じさせる。ファゴットが響く……」

目を閉じ、交響曲の調和のとれた旋律と躍動感に身を委ねる昌幸の脳裏に、別名を『森と湖の国』と言われるフィンランドの風景が鮮やかに浮かび上がる。

僅かな風に新雪の霧を湧き立たせる木々、サイマー湖の、かすか

な夕陽を浴びて金色に輝く漣。北部地方の風景は、カーモス（極夜）と呼ばれ、一日中殆んど太陽が昇らないためであろうか、落ち着いた静かな佇まいを見せる。

……力強く、ダイナミックな楽器の雄叫びは、突然沈黙する。ほとんど休む間もなく第二楽章が始まる……

山の端から顔を出す旭光のようにきらめく強い律動、湖面に写し出される山のように、落ち着いた柔らかな調べ。場面は一瞬で切り替わる。和音と和音がぶつかりあうような激しさから、お互いの音色をいたわりあう調和の取れた音階へ。

四季の移り変わりがハッキリし、美しい水、山、森に恵まれた、日本とよく似た地理的条件、自然環境がシベリウスの感性を身近に受け取らせているのかもしれない。心地よい耳によく馴染む旋律が続く。

ゆったりと音楽の世界に浸っている昌幸の脳裏に、何故か、デンマークにあるはずの人魚姫の像が浮かび上がる。彼は思わず小さく頭を振ると慌てたように眼を開けた。隣で麗華は、少し上気したようにうつすらと頬を染め、涙ぐんでいるようにも思える。視線を感じたのか、チラッと昌幸を見ると、照れたような表情で魅力いっぱいの笑顔を見せた。

「あなた、ありがとう。素晴らしいプレゼントを頂いたわ。オーロラ、サンタクロース村、このコンサート、どれも凄く印象的だ。夢の中にいるみたい。きっとこれから先ずーっと忘れないって思う……」

ホテルに戻ってもまだ麗華は、余韻の大きな渦の中にいた。

## 17、転換点

二人が仙台に住む様になって、やがて、十年が経過しようとしていた。

じつと目を閉じ、何か深い考えに沈んでいた昌幸が、心配そうに覗き込む麗華に言った。

「……何年か前きみが言っていた、僕にも人物画が描ける時が必ずやって来ると言うことが最近、頭の中に浮かんで仕方ないんだ。いままでそんな事考えもしなかったけれど、無性に人物が描きたくなってきた。もし、嫌じゃなかったら、きみを描かせてくれないかな」

「……いいけど、まさか、ヌードじゃないわよね」

「ち、ちがうよ。そのままでもいいよ」

昌幸は、眩しいものを見るように、目を細めじつと麗華を見ている。一時間が経過した頃、やっと何かを掴んだのか、ふーっと大きく息を吐いた。

「ありがとう。もう動いてもいいよ」

怪訝そうな表情を浮かべた麗華を見て、

「きみの魅力、人格、美しさ、そういったものは僕なんかの力量ではとても表現しきれないと思う。でも、きみそのものや、きみを愛する心だけなら、今の僕にも描けそうな気がする。今はずーっとその感覚を掴み取っていたんだ」

「あなたの力は、わたしが一番信じてる。あなたが、わたしを通して人そのものを描きたくなっていたということは、もうそろそろ描きなさいって言う神様の意思だっと思うわ。きつと素晴らしい作品になるわ」

「随分長い間、自分には人は描けないと思っていた。しかし、きみと再会した時、何故か、いつの日か、この人を描いてみたいと言う衝動を感じた。でも、その頃の僕には、とてもきみのイメージを描ききる力はなかったんだ。どうしてかはよく解らないけれど、いまは、不思議なことに余分な力みや思い込みを持たず、自然に描けそうな、そんな気がしている。どんな絵になるかは判らないけど、一生懸命描いてみるよ」



「何日でも、何か月でも待つてるわ。邪魔しないようにして応援してる」

「いいよ。今まで通りで。その方がきつといい絵になると思う。あまり肩に力が入ると失敗するから、意識しないで普通にしていって欲しいな」

昌幸は、一心不乱にキャンバスと対峙している。麗華は涼子と一緒に、新たに設立されたNPO法人「芸術家の芽を育む陽と水たち」の会合に出かけている。

一時間半絵の具とペインティングオイルの世界に身を置いた彼は、少し疲れを覚え筆を休めた。麗華が用意しておいたコーヒーをカップに注ぐ。右手が眉間を揉み解す。その時、部屋の隅の電話が鳴った。受話器を取ろうと立ち上がった彼の意識がそこでフツと途絶えた。寒さを感じ意識が戻ってきたのは二時間ほど後のことであった。しばらく経つてもまだふらついている。身体中の関節に痛みがあった。立ちくらみであろうか。それにしては……。彼は、風邪をひいただけだと無理に思い込むことにした。麗華には何も話さなかった。二日後、三十九度を超す発熱と猛烈な倦怠感に襲われた。

麗華に背中を押されるようにして受けた近所の町医者の診断は、「風邪でしょう。温かくして休養を取っていればじきに治りますよ」

という事であった。しかし、健康に自信を持っていた彼は強い不安を感じた。その日から三日間、

「お願い、ちゃんと寝てて。わたしがいいって言うまで絶対安静よ」

麗華の優しさに満ちた命令により、床に就いた。

鬼の霍乱とでも言うべきか、結婚以来初めてのことであった。

五日経ち、熱は正常に戻った。食欲も少しずつ回復してきたように見えた。彼は、何かに急かされるように絵筆を握った。まだ全身を覆う強い倦怠感、脱力感は拭いきれていない。足元も少しふらつ

く。だが、筆を持つ彼の背筋はピンと伸び迫力すら感じられた。

「あなただって……」

麗華はそんな様子を呆れたような、不思議なものを見るような表情で見詰めていた。

……二十号のキャンバスに描かれた彼女は、生命を持っている。

優しさを湛えた瞳、今にも美しい歌声を奏でそうな唇、愛嬌のある鼻、穏やかで温かみのある頬、どれも彼女そのものの存在感が、圧倒するような迫力を隠し、包み込むような豊かさで見入る人を魅了する。

さりげなく配置された可憐な花々も、鮮やかな色使いの割には、自己主張も少なく、まるで彼女にかしづく童女のように、幸せの歌を響かせている。

彼の画家としての力総てをぶつけたと思われる筆致と、それでいて、自然体で描かれた柔らかかみに、愛情の深さを感じることが出来る。しかし、天使を連想させる全体の印象は、荘厳な中に大きな安堵感を持って見る人を迎えてくれる。生まれて初めて本格的な人物画に取り組んだ彼の、積年のエネルギーが見事に作品に生命の息吹を与えたと言えよう。最高傑作である。……（月刊・

美術評論）

昌幸の力と想念を込めて描かれた作品は、『愛』と題され、仙台芸術文化会館の個展会場で三十点ほどの新作とともに発表された。

二人が再会した帝都百貨店で開催して以来、国内では十一年ぶりの個展であった。

会場は連日多くの観衆で賑わっていた。待ち焦がれていたように訪れる友人や知人も数多く、二人は忙しい時間を過ごしていた。楽しそうに友人達と語り合っている昌幸の表情を時折よぎる疲労の色に、麗華は気懸かりなものを感じていた。

「あなた、どこか具合が悪いの？ 少し疲れたんじゃない？」

「いや、何でも無いよ。元氣、元氣。僕なんかより、きみは疲れ

ていない？」

昌幸は殊更明るく言った。しかし、そんな彼の笑顔を見ても、麗華は自分の胸にふと芽生えた小さな不安の萌芽に戸惑っていた。

「先生、大変な盛況ですね。おめでとうございます」

「君島さん、先生と言うのはやめてください。ただの絵描きなんですから、何となく抵抗を感じます。」

「二階堂さんのその物腰は十年前に初めてお会いした時と全くお変わりになりませんね」

昌幸が日頃懇意にしている画商の君島は、感心したように大きく頷きながら言った。

「あ、そうだ、ちょうどいい機会だ。あなたに一つご相談があるのですが、少し時間を頂いてもよろしいですか？」

承諾を得た昌幸は麗華を伴って、喫茶室に入った。

しばらく目を閉じて考えをまとめていた昌幸が静かに口を開いた。「ずっと前から考えていたことがあるのですが、そろそろ実行しても許される時期かなと思ひましてね。あなたに是非とも協力して欲しいことがあるのです」

「何ですか？ 私で出来る事なら何でも協力させて頂きますが」

「……実は、私の作品の値段のことなんです」

「ああ、そのことですか。いいですよ、もっと評価に見合った金額になさっても」

「いえ、今の評価が安すぎるとかそういうことではないんです。

値段は今のままでも充分だと思っっています。正直に言って、値段のことはあまり関心がないんです」

「じゃあ、あの……」

「少し説明させてください。内容を整理しながらお話しますから」

昌幸は、しばらく沈黙した後、静かに語りだした。

「この十年の間、あなたや他の画商さんたちにお渡しした作品の

他に、大小取り混ぜて五十点ほどの作品を制作してきました。これは、この人のほかには未だどなたにもお見せしたことはありませんが、当然のことですが、全部一生懸命描いた作品です。それを、私の希望としては、来年の秋頃ですが、どこかで個展を開いて発表し、販売したいと思っています。その時、作品には一切値段を付けず、一つずつ作品の前に箱を用意しておいて、購入希望のある方に、ご希望の金額を記入していただくのです。つまり、入札のようなものです。そして、会期が終了したら、その金額の平均を出し、それに一番近い方にお譲りしたいと考えています。解り難いかもしれませんが、例えば、五人の方が入札されたとして、その金額が、十、八、四、二、二だったとしますと、平均は五・二になります。その場合は、四と記入された方にお譲りするわけです。もちろん四という金額で。そこから諸費用とか、あなた方の手数料なんかを差し引いた残りを頂ければいいのです。どうでしょうか、ご協力お願いできませんか？」

「……やっぱり、尊敬を込めて先生と呼ばせてください。素晴らしいと思います。喜んで協力させて頂きます」

「素敵だわ、あなたそんなことを。わたしも素晴らしい事だっと思っ」

「僕は自分の作品たちを一番可愛がって頂ける方に、一番素直な形でお譲りするにはどうしたらいいかと考えていて思いついたんだよ」

「長く画商をやっている私が言うのも変ですが、いまの絵画の世界のあり方には常々疑問を持っているのです。この人の作品は号あたり幾らっていう決め方、確かに私達には判り易くて便利ですが、元来、絵というのはそういうものじゃないんじゃないかと思うんです。うまく言えないのですが」

「人間て感情の生き物って言うでしょ。その感情や感性って人それぞれみんな違うわよね。って言うことは、一枚の絵だって、ある人は自分の感性にぴったり合って、幾らお金を払っても手に入れて

毎日眺めていたいと思っても、別の人には全然そんな気持ちにならないって事はあると思う。わたしの歌だって、好きな方もいてくれたし、逆にうるさいなって感じてた人もいたと思うわ。絵も歌も、波なのね、波長なのよね。それが自分の感性とぴたって合えば、癒されるし想像の世界にも入っていかれるけれど、合わなければただ煩わしいだけよね。幸いわたしの歌声も、この人の絵も、いいなって思ったださる人の方が多かったからこれだけ評価を頂いていると思うわ」

「確かにそう言えるでしょうね。長年絵を扱ってきたから、私も専門家と言われていますが、本当の絵の善し悪しなんて判っていないですね。ただこれはあの先生の作品だから素晴らしい、名前を聞いた事もない人の作品だからたいしたものじゃないと言う見方は、残念ながら多くありますね。そう言えば、何年か前になります、新聞紙上を賑わしていました、神戸のオークションに出された作品で、何人かの専門家が見て、一、二万円と判断していた絵が、ルービンの作品だと判って、六千万円で落札されたと言うことがありました、そんなものだと思いますね。これは、完全に、絵の評価なんかじゃなくてルービンの名前を落札したんですね。そんなことなら、ルービンの署名だけ売買すればいいんですよ。おっと、これはここだけの話ですが」

「僕もその記事は読みましたが、あの時、ルービンの『劇場の人』と判った時点で出品を取りやめ、日本各地で展示した後、スペインのルービン美術館に寄贈して欲しいなと思いましたが。もともとあの作品は専門家の人達でもその程度の評価しかしていなかったのですから。反省も込めて、そうして欲しかったですね」

「そうですね。何でもない作品と思っていたものが、ルービンの作品と判った瞬間に、大金に換わったのですから、まったくおかしな事ですね。携わった人たちは、自分たちの審美眼と絵に対する感覚を深く反省する必要がありますね」

「わたし思うのだけれど、絵や彫刻なんかを人間が作り出した価

値観で評価することに無理があるんじゃないかしらって。だって、芸術作品で、感情、感覚の結晶じゃない？ 見ている人が、この感覚はお金にしたら幾らか、とか、抽象画なんかの時は、これだけ思索の世界で遊ばせて貰ったから幾ら、なんて絶対思わないもの」

「そうですね、せめて、画商の私だけでももつと考えて見たいと思います。それと、先程の個展のお話ですが、何人か話の判る仲間もいますので当たってみます。もちろん、私は全面的に協力します」

大変な盛況のうちに個展は無事終了した。

この頃、麗華は徐々に大きくなる不安感の正体にまだ気付けなかった。しかし、昌幸が『愛』と題した作品を描いたこと、画商の君島に話した次の個展の計画、と考えると、この不安の原因は、何か昌幸に関わる事の様な気がして落ち着かなかった。

涼子、山口夫妻、石田の四人が訪れたのは、個展が終了して二週間が経った頃の事であった。

「個展の時はありがとうございました」

「いえ、それより、大変なご盛況で……」

例によって、昌幸と山口は、涼子曰くところの、取り留めのない挨拶を交わしている。

涼子と麗華はそんな様子を笑いを堪えて見ている。

「由美子さん、お久しぶりね、元気だった？ 困っている事ない？」

「はい、子供達に振り回されていますけれど、元気になっています」

「山口君は大事にしてくれている？」

「とてもよくして貰っています。幸せです」

「いいわね。この人、変に生真面目な所があつて、一緒に暮らしている面白みは少ないかもしれないけれど、その分、絶対、頼りになる人だし、浮気の心配なんか要らないし、わたしが言うのも変

ただ、これから先、ますます魅力が出てくるタイプだと思っわ。  
由美子さん、この人旦那さんを選んで、あ・た・りよ」

麗華の言い方に、由美子はクスツと笑った。隣で山口は真っ赤になっっている。

石田は一年前、妻・幸子を病気で亡くした。胃がんであった。それほど愛していたのかと思うほど落ち込んだ彼も、友人たちの親身を尽くした支えと、持ち前の負けん気で、その表情に明るさが戻りつつある。

「石田さん、文化部から編集部に移られて、どうですか？ もう慣れられたんでしょ」

と、昌幸。

「だめですね。僕は、最初は編集部配属されたんですが、十年以上も離れていますと、浦島太郎のような状態ですね。判らないことばかりで、毎日右往左往しています。仕事の内容も全く違いますし、いまでは粗大ゴミの扱いを受けています」

室内が笑い声に包まれた。

「麗華、温泉旅行に行かない？ 私、少し疲れ気味だから、二、三日のんびりしたいのよ。付き合ってよ。ご主人が一緒じゃなきゃ駄目？」

「いいけど……」

「いいなー、行っておいでよ。初めてだよ、そんな旅行は」

「うん、でも……」

「僕の事なら何とでもなるよ」

「……本当にいいの？」

「もーっ、行こうよ。旦那様がいいって言ってるんだから」

「じゃー行くわ。で、いつから？」

「そうね、あんたの気が変わらないうちにと言っことで、来週の水、木、金の三日間でどう？」

「いいわ。それでどこに行くの？」

「いい温泉って言えばたくさんあるけど、作並温泉なんかどう？」  
と言う事で、女二人の温泉旅行が決まった。  
結婚以来初めてのことであった。何処へ行くのも一緒と言う昌幸  
と麗華にとっては大きな出来事であった。

「待った？」

麗華が腕時計を覗いた時、背中で涼子の声がした。列車で行こう  
と考えたが、あまり人目に付くのを嫌がった麗華の意見を取り入れ、  
結局車で行くことになった。麗華は携帯電話をしっかりと握っている。  
一時間に一度は電話をするのではないかと思つた涼子は、

「あんたね、この旅行の間は、旦那様のことは忘れなさい。携帯  
電話も禁止よ。解つた？」

「そんなー、じゃ、わたし行かない」

「わかつたわかつた。わかつたからスネないでよ。電話は許して  
あげるから。でも、せめて、半日に一度ぐらいにするのよ。いいわ  
ね」

麗華は、まだ、ふくれていた。

しかし、もともと仲のいい二人の事、車が東北自動車道に乗る頃  
にはいつも通りの弾んだ声が車窓から聞えていた。

「ねえ、わたし達が初めて会つた時の事、涼子、覚えてる？」

「あれはねーっ、三十年以上前のことだよ。たしか、大学の学  
食で隣に座つたんじゃなかつたっけ」

「そうよ、おっかなそうな先輩が、一人でカレーライス食べてた  
のよね。前に、でんつて置かれた六法全書が手垢で汚れていたわ」

「そんなこと、よく覚えてるね」

「わたしが食べ終わって立ち上がった時、涼子も立とうとしてぶ  
つかつたのよね。痛かつたわ。で、わたしが、あまり痛い痛いつて  
言うものだから、おぶつて、お隣の大学病院まで連れて行ってくれ  
たのよ。おっかなそうな感じだけど、意外に優しい人なんだって思  
つたわ」



「そうそう、それが初めてだったよね。あの時、あなたの脇腹に大きな青痣が出来てた」

「涼子の肘が当たったのよ」

「スカウトされてデビューしたのは、その後だっけ」

「そう、あの翌年だったわ。自分では何がなんだか判らないうちにステージに立ってた」

「私は四年の時、司法試験受かって、修習所やら、イソ弁なんかで、二、三年会わなかったんだよね」

「ええ、わたしもテレビやラジオなんかで忙しかつたし、で、契約のことでちよつと揉めてた時、涼子の事思い出して電話したのよ」

「あの時は結局うまく治まったんだよね。お互いに誤解してただけだった」

「そうよ。でも、あの頃わたし凄く疲れてた。色んな事に。今思うと、わたしの一番辛い時期だったみたい」

「あんた見てて、何とかしてやらなきゃって思ったんだけど、替わって唄って上げるわけにもいかないし、それで、事ある毎に食事なんか誘い出したんだ。幸い、あの頃私がいた事務所の遠藤善之助先生が結構大物で、特に芸能界なんかには睨みが効いたから、私なんかの誘いでも、事務所を通すと、駄目って言えなかったんだよね」

「あら、そうだったの？ 何時も何も言わずに出してくれたから、わたし不思議に思ってたのよ」

「でも、考えてみれば長い付き合いだよ」

「そうね。わたしは、涼子に助けられるばかりで、ほんとに感謝してるわ。あなたがいなかったら、きつと、いまのわたしはいないって思うもの」

「助けたなんて思っていないけど、華奢で、繊細なあんたと、がさつで、ぶつきらばうな私、よく喧嘩もせず続いたね」

「わたしは本当のお姉さんって思ってるから、いつも一歩引いてるもの」

「え、そうだった」

「そうよ、判つてよ」

「ところで、昌幸さんの事なんだけど、彼、どこか具合が悪いの？ 病気なんじゃないの？ この前の個展の時、顔見てて凄く気になったのよ。あんた、思い当たる事ないの？」

「……ええ。……」

長い沈黙の後、麗華は、自分をモデルにして、初めて人物画を描いた事、先日の画商・君島との話など、気になる事を、ぼつりぼつりと話し出した。

「あの『愛』を描いている時の昌幸さんの表情もそうなんだけど、描こうつていう気持ちになつた事自体、凄く気になるのよ。絶対に考えたくもない事なんだけれど、何か焦っているような気がして。それに、君島さんにお話しした事だつて、いま思い切つてやつておかないとつていう悲壮感みたいなものを感じるの。わたしの思い過ぎなら嬉しいのだけれど」

「それどあんた聞いてみたの？ どこか具合の悪い所はないかって」

「それが、いつ聞いても、元気だよ、それよりきみは？つて言うもの」

「そうだよねー、彼はそういう人だよね」

「だから余計気になつてしまつて」

「あんたはいつも一緒にいるから判らないかもしれないけど、彼、少し痩せたよね」

「やつぱり涼子もそう思う？」

「よし、この旅行から帰ったら聞き出してあげる。私になら話してくれるかもしれないから。で、今度の個展つていつ頃の予定なの？」

「来年の十月つて言つてたわ」

「じゃ結構忙しいんじゃないの？」

「そうでもないみたい。いままで描き貯めていた作品が五十点ぐ

らいあるから、それを出すって言ってたわ」

「……まあ、いまここで色々推測してみたって判らないから、この話しは私に任せて、難しいだろうけど、取り敢えずはこの旅行楽しんでしましょ。ね、判った？」

「はい、先輩」

「そうそう、その調子」

明るい性格の彼女たちの、やや暗い気分を乗せて、車は抜けるような青空の下、高速道路を快調に走って行った。

結婚以来初めて過ごす一人だけの三日間、昌幸は、麗華を送り出すと、東北中央病院に来ていた。

彼は、五日前、麗華がカルチャースクールに歌唱指導に出かけている間、高畑広昭医師により、様々な検査と診察を受けた。その結果を聞きに来たのである。

「……かなり貧血の状態ですね……」

慎重に言葉を選びながら、高畑は言った。

「……貧血ですか？ ……そうしますと、あの立ちくらみや目眩の原因はそれだと？」

「……まあ、この数値を見ますと、白血球、赤血球、血小板といずれも相当少なくなっている状態と言えますね。……今後の治療を考えますと、……きちんとお話しした方がよろしいかと思えますのでお話しするのですが……」

高畑医師は、ここで言い難そうに言葉を切った。

「……はつきりとおっしゃってください。自分の状態を考えますと、あまりよくはない、むしろ、かなり深刻な状態なのではないかと覚悟をしています」

「……再生不良性貧血、あなたの場合は、それより少し悪化した、再生不能性貧血と診断せざるを得ないようです。もっと詳しい事は、入院して頂いての精密検査の結果を待つ事になりますか……」

高畑医師は深い苦悩の色を浮かべている。

「……そうですね。それで治る可能性は？ 治療は可能なのですか？」

「勿論、全快は不可能ではありません。私自身、希望を持ってあなたの治療に当たりたいと考えています。具体的な進行の程度や治療方法などは、私の持っている知識とこの病院の総力を上げて対応していきたいと思っています」

帰路、昌幸は図書館で『再生不能性貧血』についての一般的な知識を得た。

……白血病と言われる。原因は殆んど解明されていない難病で、治療法としては、新鮮な血液の輸血が主である。白血球の減少により、感染症に対する注意が最も必要である。……再生不良性が悪化した再生不能性貧血の場合の生存は、様々な症例からかなり異なるが、一般的には半年から一年と言われている……

昌幸は、一人の部屋で、もう三時間を過ごしていた。麗華にどのようなしてこのことを伝えたらいいのか。彼女の受ける衝撃を少しでも和らげることが出来る方法はないか。また、自分がいなくなつた後の彼女の生き方など、考えなければならぬ事は多い。しかし、簡単に答えが見つからない事ばかりであった。思考は出口のない迷宮に入り込む。ただ、不思議な事に自分が死ぬ事への恐れは全く浮かんでこなかった。

昌幸は、電話が鳴る音に、ハッとわれに返った。いつの間にか真つ暗になっていた部屋の灯りをつけると受話器を取った。

「あなた、どうしたの？ どこにいたの？ ねえ、何かあったの？」

「ああ、きみか、いま旅館？ お風呂は入ったの？ うん、どうもしないよ。少し転寝をしていたんだ。大丈夫だよ。何でもないつて。食事はしたの？ へーっ豪華だね。僕はお寿司の出前を取ったよ。今から食べようと思ってる。そう、気にしないで愉しんでおい

で

「ねえ、あまり元気ないわね。すぐ帰ろうか？」

「本当にいいって。未だ少し寝ぼけているんだよ。大丈夫だって、珍しくあまり噛み合わない会話のまま電話は終わった。」

「やっぱり涼子さんの力を借りるしかないのかな」

期せずして二人は同じ選択肢を採ろうとしていた。

「……先日、東北中央病院の高畑先生の診察を受けました。結果は、再生不能性貧血と診断されました。……ご存知かもしれませんが、あと半年から一年の命だと医学書には書かれています。先生も全力で治療に当たるとおっしゃってくださいましたが、僕としては回復は難しいと思っています。不思議なんですけど死ぬ事への恐怖感はありませんが、麗華の事だけが気懸かりで、心配でどうにもならないんです。この事実をどう彼女に伝えたらいいのか……」

「……そんな……」

「一時の淋しささえ乗り越えれば、多くの素晴らしい友人達に囲まれ楽しく暮らしていくことが出来ると思います。ただ……」

「……そんな辛い事って……」

涼子の頬を涙が伝っている。

「……いくら私達が一生懸命支えたって、あの子は、きっと、死ぬよ。そういう子なのよ。判ってるでしょ」

「……判っています。でも、僕は彼女に生きて欲しいんです。勿論全力で説得します。だから、涼子さんも助けてやってください」

「……私も命を懸けて説得するわ。麗華まで一緒に失うなんて考えただけでも辛すぎるわ」

その時、麗華が帰ってきた。

「ただいま、ねえ、あなた、変な話しなのよ。あらっ、涼子来たの？ どうしたの？ あなた泣いてるの？」

「な、なに言ってるのよ。私が泣くわけないじゃない。ちょっと眼にゴミが入っちゃったのよ」

涼子はうるたえながら言った。

怪訝な表情を浮かべながら、麗華は涼子の顔を覗き込んだ。

「恵子さんったら、お電話で子供の事で教えて欲しいって言ったのに、全然関係ないことばかり話すのよ。子供たちだって元氣だったし、困ってるようには見えなかったわ。何だったのかなー」

「恵子さん、誰か話し相手が欲しかったんじゃない？」

「そうかなー。涼子、あなた今日来るって言ってたっけ」

「この近くまで来たから、ついでに寄ったのよ」

妙にぎこちない会話を打ち切るように、

「あすにでもゆつくり来るわ。じゃーね」

と言って帰って行った。

麗華はまだどこか納得できない表情を浮かべていた。

何気なさを装いながらも、沈んだ麗華の眼を見て、昌幸は自分の大きな間違いに気が付いた。

……こんな重大な事はやっぱり自分できちんと話さなくてはいけない。涼子さんたちの力を借りるのはその後の事だ……

昌幸は、麗華の正面に向き直ると、静かに話し出した。

「……実は、きみに大事な話があるんだ。落ち着いて聞いて欲しい」

「……」

「きみ達が旅行に行っている間に、東北中央病院に行ってきた。

そして、検査結果が出たんだ。白血病、正確には再生不能性貧血と診断された。あと、半年から長くても一年ぐらいしか生きることが出来ないらしい。高畑さんは、自分と病院の総力を上げて治療に当たると言ってくれたけれど、発達している現在の医学界でも原因不明の難病と言われているこの病気が克服できるとは残念だけども思えないんだ。これは、僕の運命だと考えて素直に受け入れる覚悟は出来ている。でも、きみの事だけが心配でならない」

「……」

聞いていた麗華の瞳に、一瞬強い光が射した。その眼を昌幸に向け、自分を押さえる様に静かに言った。決意を込めた表情であった。

「あなたが『愛』を描こうと言う気持ちになった時、わたしの心を小さな不安がよぎったの。あなたに聞いても、わたしの事ばかり心配してて答えてくれなかったから、それが何かは判らなかつたけれど、だんだん大きくなつてきて、恐ろしくて、頭がおかしくなりそうだった。いま、やっとそれが判つて、物凄く後悔してる。もっと早くあなたに検査を受けてつて言えばよかつたって……。わたし戦うわ。全てをかけて戦うわ。あなたをそんな病気なんかに取りたくないもの。わたしの生命をかけて戦うわ。……。もし、それでもだめだったら……。わたし、あなたと一緒にいきたい。お願い、その時は、一緒に連れて行って」

「……僕は、辛うじて生きている惨めな姿をきみにだけは見せたくない。元気に笑っている記憶だけ残して、静かに消えて行きたいと思ってるんだ。きみは、僕の分まで生きて欲しい。出来る事なら早く僕の事を忘れて、素晴らしい友人達と楽しく生きて行って欲しいと思ってる」

「……」

「きみと出会って、精神的に凄く豊かになつて、世間で認められる絵をたくさん描かせて貰った。その意味で、この世に生を受けた僕の使命は充分果たせたと思ってる。でも、きみは違うんだ。ずっと前、高畑さんも言っていたけれど、きみは、出会った人すべてを、本人が気付かないうちに、穏やかで、優しい人に変えていく、強くて温かい影響力を持った特別な人なんだよ。きみ自身は意識してはいないようだけれど、人の心が荒廃し、殺伐としていると言われる今、まだまだきみの大事な使命はたくさん残されていると思うんだ。そんな大切な人が、僕なんかと一緒に行くなんて、決して許されない事じゃないだろうか」

「……いやよ。あなたがいなくなった世の中に、わたし一人がどうして生きていかれるの？ そんなわたし達じゃなかつたでしょ。」

もしわたしにそんな大事な使命があるとしたら、それだって、あなたがいたからじゃない。わたし一人の力なんかじゃないと思うわ」

「……でも、きみは生きて欲しい。しばらくは辛いかもしれないけれど、いい友達、どんな時にも支えてくれる、素晴らしい友達がいっぱいいるじゃないか。そんな人たちに囲まれて、神様が僕のところに行きなさいと言うその時までしっかりと生きて欲しい」

懸命に説得を続ける昌幸の頬を涙が伝う。

「……わたし、もう、神様なんて信じないわ。こんな残酷なことがある？ ……いやよ、わたし一人だけ残さないでよ。一緒に行こうって言うてよ。いままでみたいに手を繋いで行こうって言うてよ。あなたと一緒になら、イギリスや京都へ行った時みたいに喜んでついて行くわ。お願い、連れて行って……」

泣きじゃくりながら麗華は言った。

「……」

もう昌幸には言うべき言葉は思いつかなかった。

「個展を来年の秋なんて言うてないで、出来るだけ早く開きましょ。あなたとわたしの最後の夢になるのだから、素晴らしい個展にしましょね」

麗華は決意を込めて言った。

## 18、最後の個展

ある程度の事情を打ち明けられた画商・君島たちの私心を忘れた協力で、個展は、その年も押し迫った、十二月八日から二週間、仙台文化センターにおいて開催される事になった。

会場は大きく二つに分けられ、最初の部屋には、作品『愛』を中心に、国の内外から借り受けた昌幸の作品、四十点。次の部屋に、十年に亘って描き貯めた五十点をそれぞれ展示した。

作品の魅力と意表をついた販売方法が評判を呼び、新聞各紙を始



め、テレビ局も取材に訪れた。

第一会場は、照明が少し落とされ、空間にスポットライトを浴びた作品が浮き出ている。絞った音量で麗華の歌が流され、幻想的な絵画と調和して、独特な雰囲気を作り出している。

フランス・ルアン、イギリス・英欧の両美術館所蔵作品を始め、海外に渡った作品も数多く、久しぶりに目にする二人にとっては、懐かしい友や幼い頃養子に出した子供達に再会したような、妙な感慨と安堵を覚えた。

絵画は成長すると言われている。確かにこれらの作品たちは余程大切にされ、愛されていたのか、譲り渡した頃より、輝きと深みが増し、しっとりとした落ち着きさえ感じられるようになっていた。実際に、昌幸は驚きとともに大きな自信を感じていた。

「絵画は生きています。個展が終わって額から外し、仕舞っておいた作品は次第に色褪せ、くすんだ感じを与えるようになっていきますが、それとは逆に、壁に架け、毎日語り掛けていきますと、絵そのものが輝きを増し、全体の印象が鮮やかになったりするものです。ですから、ご自分の感性に合い、気に入って手に入れられた作品なら、是非、毎日眺めてやってください。話し掛けてやってください。画家が命の息吹を与えた作品を慈しみ、育んでいくような気持ちで、部屋の中央に立った昌幸は、講演で話した言葉を鮮やかに思い出していた。

麗華は、昌幸の手をそつと優しく握った。

「あなた、大丈夫？」

体調の悪化とともに受け取りにくくなっていったテレパシーも、不思議な事に、ここ数日は以前のように彼女の波長をしっかりと捕らえることが出来た。

「きみこそ疲れていない？ さっきのテレビ局の取材なんか、僕よりきみの方にスポットが当たっていたよね。久しぶりの事だから疲れたんじゃない？」

「失礼しちゃうわ。会場に流れてるわたしの歌の事ばかり聞くん

ですもの」

「いいよ、彼らだつてきみに会えて嬉しかったんじゃないかな。それより、君島さんが言っていたけれど、外に二十人ぐらいの人が並んで待っているから、開場を少し早めるんだつて。そろそろ入口でお迎えしようか」

涼子、高畑、山口の三人が真つ先に姿を現わした。

麗華はもう涙ぐんでいる。

「あんた、すっかりしなさい。ほら、彼だつて困つてるでしょ」

「ありがとう来てくれて。お願いゆつくりしていつてね」

「当たり前でしょ。毎日来るわよ。ずーっと付き合つてあげるから、さあ、涙ふいて」

「……ありがとう」

「ところで、どうしても欲しい作品があつた時、入札するんですよ。でも、あのシステムつて、高い金額を書いたからつて必ず手に入るつてものじゃないわよね。どうしたらいいの？」

「そうですね、作品の価格を吊り上げたくないから考えたやり方なんですよ。却つて高額の方が手に入らないと思います。やっぱり、ご自分の評価を素直に書いて、後は運に任せるしかないんじゃないでしょうか」

その時、麗華は、涼子を部屋の片隅に呼ぶと、小声で耳打ちした。

「あなた達には、ちゃんと個性に合つた作品が用意してあるから、個展が終わつたらあげるつて、昌幸さんが言つてたわよ」

聞いていた涼子の顔に笑みが広がつた。

「えーっ、感激。私に合つた絵つてどんな絵だろうね。楽しみだわ。早く終わらないかなー」

「何言つてるのよ。まだ、今始まつたばかりでしょ」

やっと麗華の表情に明るさが戻つてきた。

絵画が投資や財テクの対象になつたり、また、作品そのものの評価に関わりなく、知名度が価格決定に大きな要素を占める現状に抗

議するかのような、この入札の方法は、新聞各紙を始めとするマスコミには概ね好意的に扱われた。しかし、画商たちは、反対を表明し、専門家といわれる人達や画壇は完全に無視した。しかし、この考え方が絵画の世界に一石を投じた事は間違いないであろう。

## 19、終章

個展が無事終了して十日経った日、昌幸と麗華は、親しい人七人を招いて自宅でパーティを開いた。招待された人達は皆、

「この二人が開くパーティはこれが最後になるのだろうか」という漠然とした不安を抱えながら集まっていた。

「いらっしやい。個展の時にはありがとうございました」

玄関に入る客たちは、微笑みを浮かべて迎える二人を見て、一樣にホッとした安堵を感じた。しかし、かつて二人が、居間兼応接間兼アトリ工兼物置きと笑いながら言っていた室内は、いまは整然と片付けられ、その空間の広さに、思わず息を呑む思いであった。

「きょうはお客様をたくさん呼びましたから、少し片付けましたのよ。そうしたら、却って居心地が悪くなってしまつて。ごめんなさいね」

彼らの戸惑いを感じた麗華が明るく言った。

「今日はお招きを頂きまして、ありがとうございます」

「もう、山口君は堅いんだから。今日は内輪の集まりだから、そんな堅い挨拶はしないの」

暗くなりがちな室内の雰囲気を変えるように、涼子が言った。

「そうよ。いつもみたいに、もっとリラックスしてください。めずらしくお酒もたくさん用意してあるのよ。さあ、高畑さんはワインでしたよね」

「あ、はい、すみません」

あわてて高畑が言った。続けて、

「二階堂さん、入院は来週の月曜日ということだ」

「高畑さん、今日はその話しはちょっと」

「みなさーん、聞いてくださーい」

タイミングを見計らったように、麗華が少し声を張り上げた。

「涼子にはこの前言ってしまいました。この人が、お世話になった皆さんのイメージに合わせた作品を一点ずつご用意しました。今からお渡しします。遠慮なさらず受け取ってください」

「ちよつと、お世話になったなんて、そんな言い方しないでよ。

まだまだこれから先も続くんだから」

涼子はかなりナーバスになっている。

「あ、ごめんなさい。お世話になっているって言い直すわ」

「まず涼子、はい、これ」

「高畑さんはこれね。そうそう、みんな大きさが違うけど癖まないでね。わたしが見てても、一生懸命その人のイメージに合わせて描いてたから」

「そんな、僻むって事はありませんよ。僕なんて、この前の個展では七点も入札したんだけど、一点も手に入れられなかったんです。ここで頂けるなんて最高に嬉しいです」

「七点ならまだいいよ。僕は、かなり思い切って、十二点入札しましたが、あとで、全部落札できたらどうしようか、親父に借りようかなんて考えて眠れませんでしたよ」

「で、どうだったの？」

「ええ、運良く一点だけ手に入れることが出来ました。あの『パリ散策』って言う題名のパリの裏町の絵ですが、どうしても欲しかった絵なので嬉しかったですね。書齋に飾って毎日眺めています」

「へーっ、手に入れた幸運な人もいるんだ。僕は五点でしたが、全部駄目でした」

「みなさん高く付け過ぎたんじゃないですか？ あのシステムですと、高額の方が落札できる可能性は低くなりますね。ただ、私としては、自分の絵の適正価格なんて考えた事もなかったから、今回

のあの評価でよかったかどうかは、ハッキリ言って判りません。そんなことより、全部の作品がちゃんと気に入ってお買い求め頂けたのかの方が気になります」

「そうよね、わたしも、それは気になるわ。ちゃんと収まるべき所に収まっているって思ってはいるけど」

自分の手にした絵に見入る者、人の絵を覗き込む者、感動して声も出ない者、室内が静寂に包まれ、三十分ほどが経過した時、

「ねえ、この絵見てたらあなたの歌が聞きたくなっちゃった。唄ってよ。お願い」

「ええっ、もう随分長い間唄っていないのよ。駄目よ」

「僕も聞かせて頂きたいですねー。ぜひ唄ってください」

「僕も久しぶりに聞かせて欲しいな。唄ってよ」

「あなたまで……。じゃ、あまり自信ないけれど」

麗華の歌声が静かな室内の隅々まで滲み込む様に流れていた。独特の小さく震えるようなビブラート、澄み切った冬の青空のような高音、家の外で降り続けている雪を優しく包み込んで溶かして行く様な低音、まさに、天使の歌声であった。身動き一つするものもない。昌幸もその身体全体で聞いていた。彼女の生涯で最高の歌声であった。昌幸だけが知っている、決意を込めた彼女の歌声は、聞き入っている人の魂を震わせ、こころに直接響き渡る。そんな力を秘めていた。涼子の、山口の、高畑の、今この場にいる全ての人の頬が涙で濡れていた。しかし、そのことすら誰一人意識していなかった。

翌日、何かを感じた涼子や山口から、一時間おきぐらいに電話が掛かる。用件は別れない。昌幸と麗華は、温かい心に感謝しながら、苦笑を浮かべる。もう、誰にも二人の堅い決意は止められなかった。机上に、そつと二通の手紙を置くと、顔を見合わせて、小さく笑みを交わした。

一通目は、高畑たちの手によって運営されている、恵まれない若き芸術家の卵たちを支援する社会福祉団体に全ての財産を寄付するための書類。いま一通には、世話になった家主への感謝と詫びの書状が入っている。

二人は、静かな室内で、ブルーマウンティンの贅沢な薫りを楽しんでいた。どちらともなく手を差し出すと、お互いを愛おしむ様に、そつと握り合う。

「……全て終わったね。いい人生だった。最高の一生を過ごさせてもらった。きみに、そして、神に感謝する」

「いい人達だったわ。あなたや素晴らしい人達に巡りあえて、わたしこそ感謝してる。でも、神様には感謝しない。せめてあと三年いいえ、一年でいいから、あなたに健康を与えて欲しかった」

「いいよ。これ以上は未練だよ。だけど、あんな素晴らしい友人達に囲まれて、きみだけは生きていつて欲しいと思ってるんだけど」

「そのことは、言わないで。わたし一人残されて、この先何年も生きていく、そんな辛い事ってないわ。絶対いやよ。それに、一緒に行くって決めたもの」

「……すまない」

「もう言わないで。わたし、喜んでるのよ」

「涼子さん達に何か書いておく？」

「残さないわ。静かに行きましよう。きつと解ってくれるわ」

「そうだね、その方がいいかもしれないね」

翌朝、二人の姿は、北に向かう列車の中にあつた。

知らない人が見れば、二人は、楽しそうにも見えた。事実、悲しみはなかった。それは、来世を信じる彼らにとっては、新たな旅立ちにほかならない。この人と一緒に行ける。また歩いて行ける。それだけが望みであり、確信であつた。もう、とっくに言葉は必要としていない。流れ去る車窓の景色に、お互いの一生の思い出を重ね

合わせているのであろうか、繋ぎあった手が、時折、強くなったり、弱くなったりしながら、意思や会話を伝えあっていた。

（終）

京都へ、そしてフィンランドでのオーロラ観察。そして、終章へ（後書き）

二人の愛の日々を縦系に、画家としては致命的とも言える様な障害を横系に据え、オーラ、波動、テレパシーなどのファンタジックな要素をまじえて、波乱に富んだ、その分満ち足りた人生を、美しく清々しいタペストリーを織り上げるような気持ちで描きました。

夕焼け、オーロラ等自然の事象や音楽を、画家の感性というフィルターを通して見た時、どう表現できるかを最も大切にして書き綴ったつもりですが……。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5629t/>

---

幻象画（?）

2011年10月8日23時33分発行